

狛江プーター教室（狛江市中央公民館青年教室）記録誌『2003 年度いなほ』原稿

社会化支援としての青年教育

狛プー元年間講師（聖徳大学教授） 西村美東士

1 狛プーと共生

ぼくは、以前、狛プーの若者たちとの活動のなかで触発され、「癒しのサンマ」のあり方を示した。サンマとは、時間、空間、仲間の3つのマ（間）を指す。（西村美東士『癒しの生涯学習－ネットワークのあじわい方とはぐくみ方』増補版、学文社、1999年）

狛プーのような「癒しのサンマ」においては、あるがままの自分が両手を広げて歓迎される。このようにして行われる相互承認や自己受容が、成長や自立につながることを指摘した。

学歴偏重社会のような「上下同質競争」（同じ価値観の者が争いあうこと）によって現代青年を成長させよう、自立させようとしても、皮肉にも、彼らはますます傷ついていくだけである。これに対して、生涯学習社会における「水平異質共生」（異なる価値観の者が承認しあうこと）の居心地のよさを教えることは、「上下同質競争」の刷り込みを受けた彼らの「目から鱗をはがす」効果を与える。この、いわば「共生のためのトレーニング」によって彼らは自己への信頼感を回復し、成長や自立をすることができるのである。

2 本当の居場所を求めて

表1 「居場所」の分類

	種類	例
無意図の居場所	対自	自分の部屋、ひきこもり、黙想、音楽、散歩
	対他	友達の部屋、街頭、インターネット通信、(家族)
	対社会	地域活動、ボランティア活動、市民活動、(学校・職場)
意図された居場所	対自己・対社会	行政活動、青少年施設、地域施設、青少年育成活動等
一般的呼称	一次的目的	集まり方
主催事業	特定の事業目的	特定の事業目的にひかれて集まる。
活動拠点	特定の活動目的	集まることによって、ある目的を実現しようとする。
たまり場	偶発的な目的	集まっているうちに何かをやらうとする。
居場所(狭義)	即目的	居場所であること自体が主要な目的である。

ばくの「癒しのサンマ」の提起と前後して、わが国の青年教育の実践・研究においても「居場所」の重要性が指摘されるようになった。そこで、ばくは、居場所の種類を表1のように示した。(西村美東士「若者の居場所―行政が「つくる」教育的意図は何か―」、兵庫県自治研修所『研修』No218、2001年)

表1での居場所とは、「自分らしくいられる場所」である。

その第1は、他者による居場所づくりの意図が働いていない居場所である。学生に「自分らしくいられるところ」を聞くと、真っ先に「自分の部屋」という答えが返ってくる。自分の部屋では、他者に気兼ねなく過ごすことができるため、自分らしくいられるというわけである。これは、対自(自分に向き合う)の居場所として重要である。自分の部屋にとじこもって外界との接触を断つ「ひきこもり」も、そのことによって「本当の自分」を守ろうとし、自分と対面する。長期・短期の差はあるにしても、だれにでもこのように一人になる時間は必要であろう。また、まわりに他人がいても、黙想、音楽、散歩などは、一人で自分と向き合っている時間といえる。これら「対自」の場面においては、一人のときでも安心して自分らしくいられることが、居場所成立の条件といえる。

第2は、対他(他者に関わる)の居場所である。友達の部屋や放課後の教室、部室、街頭、コンビニの前などが考えられる。ここでも、本人が「自分らしくいられる」と感じる場合に居場所になる。仲間への気兼ねや対面への気後れなどから、「自分らしさ」を出していないと感じる人にとっては、そこは居場所になりえない。しかし、そういう人でも、インターネット通信なら、対面ではないので「本当の自分」のままで発信していると感じるかもしれない。そうだとすれば、仮想的な電子空間がその人の居場所になる。

第3は、対社会(社会に関わる)の居場所である。たとえば、若者が地域でイベントを行ったり、地域や公共に関わる活動をしたりするとき、その仲間関係に「自分らしくいられる」雰囲気を感じ取る可能性が大いにありうる。活動の目的は自分たちの居場所をつくることではないのに、「自分にとっての居場所の一つだから」という理由でそれに参加する若者も多いだろう。

従来の青年教育のうち、公共的意義を重視するものが、第3の対社会機能に重点を置いてきたとすれば、狛ブーは「公共的意義を重視するからこそ」、第2の対他機能に重点を置き、青年の成長と自立を目指してきた。それは、対他の相互承認や自他受容なくして、対社会のために必要な勇気や元気をもつことなどありえないという問題意識に基づいたものといえる。

3 限定された居場所から無限定世界への巣立ち

しかし、サンマにしても居場所にしても、ある重要な問題が生ずる。それは、これらが「限られた時空間」であり、「仕組まれた参画」であるということである。現実には、あるメンバーは「狛ブーは居心地がよすぎて、自分が現実社会に適応できなくなるのが怖い」と

言って、オーストラリアのワーキングホリデーに行ってしまった。そのほか、せっかく狒ブーの居心地のよさがわかってきたのに、青年海外協力隊で中南米に行ってしまった人などの多くの事例がある。青年は、サンマや居場所から外の世界に巣立ってしまうのである。

青年教育の側は、この事態をどうとらえればよいのか。青年は、「社会の一員として（よりよく）生きられるようになる」ことを自ら望んでいる。これを青年自身のもつ社会化欲求として認識し、重点的に支援すべきであるといえよう。サンマや居場所は、青年をそこにとどまらせるためにつくるものではない。

もちろん、サンマや居場所以前の青年教育においても、青年の社会化支援機能の発揮を目指していた。しかし、それは次の2つの理由から、不十分な結果に終わっていたと考えられる。第1に、「一人でも（よりよく）生きられるようになる」ことを望む「個人化欲求」を「社会化」とは二項対立的にとらえたため、社会化を個人化と調和的に支援することができなかった。第2に、「仲間と（よりよく）生きられるようになる」ことを望む萌芽的な「社会化欲求」に対して、魅力的な新たな展望を示すことができなかった。「自分らしく生きる」という「個人化欲求」をも統合的に実現する可能性を示す必要があった。

以上のことから、現在の青年教育に求められている課題は、個人化と社会化とを統合的に実現できるよう青年を支援することであり、しかも、その「統合」とは、究極的には、限定されない現実社会に「一匹」で飛び出して行われるものなのである。

4 入り口から仕上げまでの社会化支援

先日、ぼくは、杉並区と神戸市の青年の友人関係や自己意識などについて質問紙調査の結果をまとめた。（平成13年度～15年度科学研究費基盤研究(A)「都市的ライフスタイルの浸透と青年文化の変容に関する社会学的分析」）

「友だちと意見が合わなかったときには、納得がいくまで話し合いをする」という交友関係における「能動／受動」などによって、その特徴を調べたところ、類型ごとに明瞭な差を見いだした。しかし、「個人の力だけで社会を変えることはできない」、「みんなで力を合わせても社会を変えることはできない」の回答により、「社会的能動／受動」に分類して調べたところ、ほとんど差は見られなかった。

これは、「社会的能動／受動」が、身近な人間との交友関係ほどにはリアルな認識にはなっていないことが原因と推察された。

現代青年のこの「社会化実態」のなかで、先述の狒ブーメンバーの「海外転出」などの事例は貴重な価値をもつものと考えられる。狒ブーがサンマや居場所を提供できたからこそ、彼らはそれを踏み台として飛び立っていったのだろう。狒ブーは、「巣立ち」のための「巣」の役割を果たしたといえる。

しかし、「あるがままの自分が両手を広げて歓迎される」時空間と仲間から、「一匹」として現実社会に飛び出していったとき、そこでの彼らは「対他」、「対社会」での気づきを

どのように成長や自立につなげていくことができるのか。また、「社会化の仕上げ」を行うことができるのか。狒ブーに所属していたときの「共生トレーニング」の成果として、その効果が確認できるようなメルクマールを、今後の青年教育は創出していかなければならない。

多くの青年が「社会への主体的参画」以前に、社会化への入り口としての友人関係の場面ですでに立ちすくんでいる現状において、青年教育の社会化機能はより目的、構造的に発揮される必要がある。そのための、実践と研究の役割は大きい。

